

## 北満の記録 (二) 関東軍入隊

### 入隊 満州関東軍 佳木斯(チャムス)師団 八二四部隊

九州博多港より朝鮮釜山港へ上陸。十月三日早朝、博多埠頭で下船。船酔いをして玄海灘を越えるのが大変であった。日本有数の荒波の名所であるこの海域を航行のとき、船酔いをする者が続出したが、古年兵は皆慣れたものである。

乗船前から準備が厳しく指導される。まず、船に絶対酔わない者を選出し、この者は甲板の見張りとして船酔い者の看護にあたる。

他の者は出港と同時に寝る。荷物は手摺に縛る。(転がらないように)班長をはじめ班付き下士兵の緊張感是我々にも伝わり、不安で体の調子が悪くなってくる。

いよいよ出航、エンジンの音だけでも気持ちが悪くなって来る。港を出ると船が揺れ始め、ますます激しくなってくる。

手摺につかまっていなければ、寝たまま後ろへ滑っていき、また引き返す、その繰返しでたまつたものではない。

船に慣れている者でも、結構船酔いになるといふ。その日の夕方、釜山港へ着く、ほとんど半病人だ。

同じ日本の地だが(当時)異国の地へ上陸したようだ。全く風土が違ふせいだろうか。

上陸して初めて弁当が支給される。食事をしてやっと人間らしい心地、少し元気が出る。

ここからの輸送は有蓋車である。貨車一台に一個班が乗車、貨車の中が寒いので、各人一枚の毛布が支給された。

山また山の朝鮮から、満州の広大な原野の中、同じところを走っているような錯覚に陥る。

十月七日出発してから一週間ぶりに目的地の佳木斯(チャムス)駅に着く。四方、山一つ見えない広野の中の街、駅から部隊までもまた遠い。

草原丘陵に行く。いよいよ目的地、八二四部隊の営門に入る。山砲部隊これが我々の新居住地か……。北風がやたら身に沁みる。やはり北満の地だ。

満州部隊の兵舎および付属建物はすべて、レンガ作りである。

満州の荒野はやはり広い。見渡す限り小高い山というか丘というか、木一本無い大草原である。

この広い草原の中に内地部隊の三倍も四倍もの敷地を有し、各地に点在していて、距離も相当ある。我が部隊も一方が一キロメートル以上もある広大な土地なのに驚く。

部隊本部から各中隊別の建物がズラリと並び、その裏手には付属の大きい建物が並び、これが一個部隊かと思われるほどの広さだ。

兵舎は各中隊別に分けられ二階建てである。一階は中央にだけ玄関があり裏口へ通ずる。

部屋は中隊事務室、中隊長室、将校室、会議室、その他二階は各班(四班)の兵室、下士官室など、一階は各部屋別になり、二階横に長い廊下となり、階段を境に二個班ずつに分かれ、各班は廊下をはさんで、縦に二部屋続き、各部屋には満州特有の丸い大きなペーチカがある。

入隊して一週間、初年兵だけの特別教育が行われる。古年兵とは別行動で、班長、班付き伍長二、三名の兵長、上等兵の指導で日常の勤務、部隊内の説明などで日を送る。

一日、二日は全くなのお客扱いである。食事から言葉使いまで、なだめ

たり、すかしたりの子供扱いだ。日増しにそれも変わり、本当の軍隊生活の厳しさへとつれこまれる。

入隊して一週間程して班へ編入振り分けられる。今までは輸送班長の指揮であり、今度は中隊班の本隊である。

## 兵舎と内務

一 中隊第二班に配属され、ちょうど班長、班付き伍長は同じであった。部屋は各部上下二段か左右にあり、藁マットが並べられている。最古参兵からよい場所が取られている。

一人置きに初年兵が入り、右の人が初年兵の個人的な指導をし、また初年兵はこの古年兵の身の回りのせわをするのである。

朝は起床の声で身支度、毛布の整頓(古兵はのんびり支度)をするのだ。それで戸外に出て整列をするのだが、整列は先頭の方に並ばなければならぬのだ。古参兵は先に出て、だれが早いか待っているのだ。階段は一つ、百人以上の人が一度に出るので、混雑も甚だしい。

もつとも忙しいのは夕食後である。入浴は各中隊が順次入浴時間が変わり、また中隊でも順番がある。(しかし古参兵になるといつでも入れる。将校の入浴以外は)

戦友の洗濯物、自分の物、兵器(銃、剣)の手入れ、軍靴の手入れ、(これがまた大変苦勞で、厩へ行くため靴の編み目、底の鋏のところに馬糞の藁がこびり付き、なかなか取れない。薄暗い野外の寒風吹き荒ぶ中で、泣きたくなるほどだ。そのうえ少ないときで二足、多いときは五足位の靴の手入れをする)気の休まる暇もない。

最後の九時までに軍服、襟布の取り替え、靴下の取り替え、その他の

掃除整頓など、自分のことだけでも目一杯なのに、戦友のこと、共同ですること、何一つ抜けても駄目、何時検査をされるか分からない。

教育、訓練の苦しい毎日が続く。早朝から消灯まで気の休まることなく、気持ち張りが詰めどうし、寝袋に入つてやっとホッとする。

疲れがドツと出てくる、またわびしさも出て来る。辛さか淋しさか、ひとりだに涙が出て来ることもある。

新兵さんは辛いもの、また寝て泣くのかよ……(これは消灯ラッパの音色で唄った歌詞の一部である) 辛い苦しい日々が繰り返される。

自分の配属されたのは、満州八二四部隊第二中隊第二班である。

中隊長は陸士? 期生、次席で出てきた若い中尉さんである。班は中隊四班に分かれ、各班四十名位(内新兵二十名)班長(軍曹) 班付き下士官(幹候の伍長) 他に兵長、一等兵まで、その中に古参どのは、班長の相談相手で軍隊内のことに熟知しているので、神様扱いである。同じ階級でも二年兵には古兵どのは怖い存在である。

呼び方は○○中尉殿、○○軍曹殿、○○兵長殿

呼び方にも人それぞれ、○○中隊長殿、中隊長殿、○○班長殿、班長殿、○○兵長殿、兵長殿。

時と場所に依じて替えて呼ばなければならず、まごついて失敗も多い。教育、訓練の厳しい毎日が続き、満州特有の酷寒へと急速に近づいて行く。

一期の検閲までの訓練が日夜に続き体はくたくた、気の休まるのは、訓練のときにある休憩のひとときだけ、この時だけは、厳しい訓練だが休憩の時は十分休めと教官はいつてくれる。

内務班にいるときは一時の油断も、気も抜けない。常に古参殿や先輩

の日は光っている。他班の古参といえども油断も、気も抜けない。常に古参同士通じているのだ。

先輩一人に初年兵が一人付き、いろいろと世話をする。そして先輩は初年兵の面倒をみるのである。古参兵付きになると、いろいろ都合のよいところもあり、得なことも多い。

自分のことだけでも大変なのに、この世話をすることは尚大変で、要領よくやらないと務まらない。

班長の世話は古兵殿の推薦で、一週間交代とする。一度班長に気に入られると、何回でも班長から特別に指名される。班長の身の回りのことをしておれば、古兵殿も文句も言えず他の雑仕事（私役）をしなくても良いのだ。

夕食後は雑用で、点呼まで休む間もないほど忙しい。慣れてくると、これを順序よくまた要領よく片付けて結構余裕も出来る。

動作よろしく、要領よく働いていれば、先輩の受けもよい。

寒くなつてからの洗濯は大変、油断していると盗まれてしまうのである。盗まれるのは初年兵のものがよく狙われるのだ。

支給品は一品たりとも、盗まれました。無くしましたでは通用しない。盗まれたら盗んでこい・と言われる始末。

支給品の検査は週一回位あり、員数が合わない大変なことになる。検査前に不足品が出たとき、前もって古兵殿に話すと、何とか員数を揃えてくれる。どこで員数を付けるのか、さすが神様だ。

員数は多くても少なくても駄目で、私物検査の中、金銭の検査もあり、金銭出納帳と現金が合っていないければならず、一銭の不足も駄目である。

## 軍馬の世話 厩戦場

入隊して一番大変だったのは、軍馬の世話であった。

山砲の我が部隊は、馬部隊でもある。兵員数だけ馬がいる。入隊すると結付馬として、馬一頭あずけられる。人が馬に付くのではなく、馬が人に付くのである。

人（兵隊）は一銭五厘（昭和始め）の葉書で来るが馬は何百倍の金がかかっているため兵器並の扱いである。

生れてから一度も馬に触ったこともない者が、馬の世話をするのだから大変なことだ。軍馬となると休も大きく、立派な馬ばかり、厩へ行くと実に壮観だ。厩へ行って、一体兵隊に来たのか、馬の世話に来たのか錯覚してしまう。

寒い朝の馬の爪洗いは大変な作業である。零下二十度であろうと、三十度以上になろうとも、毎日これは欠かさず、全馬に行なう。

冬季（十一月以降）になるとお湯を使うが、それも多くはなく始めの内だけである。馬の世話といっても大変なもの、人とは違い話も出来ないのに、人間より大切に扱えという。

故郷の農耕馬と同じではない。農家より徴発され（軍馬として）配置されると、殿様扱いだ。初年兵の中には馬を扱った者は一割から二割程度。ほとんどの者は、馬に触ったことのない者ばかりなので、先輩（古兵）の指導通りに行動する。班に四十頭も居る馬の世話に行くのに、多い時で三十二、三名、少ないと半数以下の時もある。少ないと大変な作業である。

古参兵は馬の運動や馬の体調を調べながらも、初年兵の指導監視をしているので、厩での移動は例え重いものを持ってもすべて駆け足である。ど

こで古参が見ているか分からないからだ。

古参兵は何処へ行つても（指示）何分で行つて帰れることを周知しているの、全くかなわない。（遅いと何処かで、何かの理由でサボったことになる）

厩は初年兵にとつて戦場と同じだ。建物の蔭は勿論、馬糞捨て場といえども、息抜きも出来ない。

他班の古兵といえども油断できない。上ではみな横の連携が取れているのだ。油断して甘く見ていると後でひどい目に遭う。

朝の点呼後、四季を通じて天気如何を問わず、朝、昼、晩、夜の四回厩に行き、馬の世話をしなければならない。

すぐ厩へ走る。当日の勤務に付くもの以外全員が行く。厩へ走りながら解散、「かかれっ！」の号令で初年兵は一斉に速歩厩の中へ突入、馬糞の入った吠（カマス）を担ぐ（いっばい入つて重いもの、少なくて軽いものいろいろある。）その日によっていろいろのものが当たる。

馬糞捨て場まで二百メートル以上もあり、糞の山は延々百メートル二百メートルの小高い山となつており足場も悪く、各班から運び込む初年兵で大混雑。体力のあるものはこの糞の山を、糞の吠を担いで登るが、体力のないものは大変だ。

その点、自分は体力では他に引けを取らなかつたので、大いに奮闘し他より早く帰り点数を上げることが出来た。

古兵で乗馬に自信のある者が毎朝、馬運動に一人で三頭から五頭くらいいつれて走る。その間に残りの馬を外に出し、古い寝わらを運び出して、きれいな厩にしなければならぬ。行動はすべて迅速が鉄則である。各班が競争だ。古兵さんがあちこちで叱咤して回る。

中の掃除が済んだら残っている馬の爪洗いだ。手の赤切れが、だんだん

多くなつてくるのもこの季節。

馬が運動から帰つてくると、汗を拭くなどの手入れが大変。休んでいる暇も無く一時間一時間半、真冬でも体中汗をかかすが、手は素手なので頗や乾で、荒れ放題。

作業中七時頃に当日の食事当番が帰舎し、朝食の準備をする。手入れもすつかり終り、水を吞ませ馬糧を与え七時半頃に帰舎。朝食をとつて午前の演習に出る。

十一時半になると午前の演習が終り、食事前に厩へ行き水を飲ませ、各馬の飲んだ量を厩当番に報告記録する。馬糧を与え帰舎。午後の演習も四時に終り厩へ朝と同じような作業をして終る。これが毎日続く。ときたまこの時に珍事が起きる。日中の厩作業中、だれかが何か不都合があつた場合、そのときは黙認されているが、その件が夜の餌付けの時に起きる。そのような時は大体分かる。

今夜の餌付けは、初年兵全部が行くようにと、次席古兵より指示される。初年兵、二年兵（一等兵）まで一列横隊に厩の廊下に並ばされ、古参兵の説教に始まり、全員往復。ピンタを食う。その痛いなんの……

一人の失敗、不都合が全員で負わされるのだ。このとき入口付近には古兵が何気なく立っている。日中は、上官や他者の目もあり、この夜の餌付けの時にやられるのだ。（平手制裁は部隊内では禁止されている）しかし、上官のいない所では、日常茶飯事なのである。

何事も率先して行動を起こし、他人の嫌がることは人の先に申し出る失敗してもやるだけやる。古兵に早く名前を、人間を知ってもらつた表面に出ようとして初年兵同士が闘うのだ。

「〇〇を知っている者はいるか？」の問いに皆手を挙げる。知らなくても手を挙げて、古兵が指名するまでに考えれば良いのだ。指名されても

分からなければ、「忘れました」で済むのだ。毎度、「忘れました」では済まないが……

「正直者は馬鹿を見る」の諺どおり嘘も方便である。要は、「臨機応変、要領よく行動する」ことであつた。

下手な要領を使うなら、しない方が良く、古兵に目をつけられたらおしまいだ。古兵が一目置くようになるまでは、相当の努力がいる。でたため一方で、暴れん坊の人が古参兵として、かなり長い軍隊生活で、隊内のことは知り尽くしており、神様扱いされている。

## 点呼

点呼の中で、夜の点呼前が特に慌ただしい。斑内の清掃、整頓、制服の襟布取替え（正規の縫付）靴下の取り替え、要領よく片付けて行かなければ、短時間では間に合わない。

取り替えなかつたら、点呼後大変なことになる。みんな初年兵にさせて、今まで二段ベッドの上にいた古参兵が、下へ降りてきて整列の声をかける。

主に加例年兵の服装の検査をして回る。初年兵は寸分の余裕もなく、忙しく動いていたので、どこかに手落ちがあるのだ。それを古兵は見付けのるのだ。古兵にはどんなごまかしも効かない。必ず見破られる。往々にして見逃すのは、急いでことを運ぶので、ボタンの掛け忘れや、取れそうなもの、襟布、靴下の取り替えが間に合わず、そのまま点呼に出たときなど時によつて、悪い古兵で、機嫌の悪い時に当たると、「要らないボタンなら」とむしり取ってしまう。

時には布地まで破れることもあり、泣きたくなる。また機嫌のよい時は

注意だけで済むこともある。

こういう時に普段の行動で、古兵によく見られている者と、目をつけられている者の違いが、このような時に表われるのだ。

全部終わったところで、班長を呼びに行く。（班長は早く来ることもある）

前記のようなことを班長は、見て見ない振りをして他の古兵と話をしている。週番司令が週番下士をつれて回つて来る。緊張の一瞬だ。班長の「気を付けエー」斑内の空気が張り詰める。

人員点呼、報告も終わり司令は次の班へ・司令が階下へ行くまで、若干の猶予がある。その後が怖いのだ。毎夜かならずある。「初年兵だけ残つてそこへ並べ」古参兵の声だ。（二席か三席十口兵で、一席の古兵は余程でないとして来ない）

「軍靴をもつて来い」ということで、手入れの結果を検査する。馬糞が付いているもの、手入れの悪いものなどで指摘され、説教である。

言い訳は一切通用しない。（薄暗いところでの手入れなので、入念にした積もりでも、明るい部屋の中で見ると手抜きがはつきりする）言い訳を一寸でもしようものなら大変、いきなり靴で叩くのだ。

手で叩くと自分も手がいたいし、他班へ音が響くので、その辺はよく心得ている。平手制裁は禁止されているが、ものを使って叩くのは禁止されていない。靴の底を嘗めさせられ、ひどい時は靴を首につるして、「各班を回つてこい」と命令する。

他班（一班、二班、四班）へ行きその入口で「〇〇二等兵は軍靴の検査結果、手入れの不十分で指摘されました。ここに申告致します」と言うのだ。その班の古参兵から「今度から注意しろよ」と言つてくれる人もあり、「うるさい、帰れ」と怒鳴る班もある。

それでもそこで「〇〇二等兵帰ります」と言って、また同じことを繰り返すのだ。各班を回って帰ってきて「〇〇二等兵行って参りました」と報告する。

申告の状況も見えるし、声も筒抜けなので、古兵はその状況を知っているのだ。時には声が小さいとか、聞こえないとか言って、何回も何回もやり直しさせられ、泣きたくなってしまう。

一か所の班がやり出すと、申し合わせたように各班が実行するので申告も賑やかだ。しかし慣れてくると、これも体したことでもなくなる。

古兵は退屈のぎに、面白半分にやり出すこともあり、初年兵は子供扱いされ、たまつたものではない。襟布の検査、靴下の検査、其の他いろいろの検査があるが、やはり軍靴の検査は（馬糞の中を歩くので）みんな失敗も多く、手入れには常に泣かされた。

自分のものだけと言うことはまずない。戦友や先輩のものが、時には四五足手入れをすることもあり、自分の靴は最後になり、時間がなく簡単に済ませてしまうので、どうしても失敗が多くなる。

## 食事

食事は時間が来ると、各班の当番兵（初年兵が三日交代で当たる）が、中隊の週番下士官（中隊各班の当番）に引率され炊事室へ受取りに行くと。

あらかじめ用意されている各班別にいれられている容器を受け取って帰る。当日、朝、昼、晩の配食をする。各班の配数は、週番が一人の違いもなく掌握しているの、間違いはない。

後は盛り付け次第というところ。当番は三名から四名、受領が終り班

内に持ち帰って、テーブル上に食器を並べ、盛り付けをする。

始めは班長から班長付伍長、古参兵と上から順次盛り付けて行く。古参までの上の人の食器には、多からず少なからず手加減が難しい。汁ものは中味より尚面倒だ。難しい時は古兵どのに聞いて、盛り付けの程度を変えて行く。

特に難しいのは、魚の盛り付けだ。先に形の良いものから上のものに順に盛り付けていき、あとは頭だか尾だか分からなくなってしまう、それも短時間で終了しなければならぬので気を遣う。盛り付けの時ほとんど時間に余裕がない。

時には全体に支給量の多いとき、また少ない時の盛り付けも難しく、多いからといって残すことは出来ない。残飯は出さないように指示されているからだ。時には炊事の軍曹が中隊の水洗場を見回る。このとき、残飯や食べられるおかずが捨ててあった場合、減量されることもあり、鬼より怖い炊事軍曹の一声でどういう風にもなる。

動きも激しいので初年兵は、いくら食べても足りない年ごろ。支給量が多い時などは、初年兵の腕にはギョウギョウ詰めて上をフワフワに見せて盛り付けをするのである。（箸を差せば持ち上がるほど）

古参以上の腕には、縁にへらを付けることはならず盛り付けには気を遣う。盛り付けが終り全員席につき、班長が箸をつけてから、始めて「戴きます」と言って食べるのであるが、早く食べてもだめ、また遅くてもだめ。

食事をするにも気を使うので、味わって食べることはまずない。食べるのではなく、詰め込むのだ。

食事後、「タバコでも吸え」と初年兵が吸い終るまで席を立たず、雑談をすることもある。

## 失敗と絆

食事当番で一度、大きな失敗をしたことがある。

ある日、責任者として他の三人と共に当番についていた時である。昼食の時、飯揚げが遅れ班へ持ち帰り、丁度盛り付けが始まったとき、既より全員が帰ってきた。さあ……大変、急がねばと気が焦る。

古参兵が「初年兵手伝えー」との指示で、それぞれが別れて盛り合わせが始まった。大勢入り乱れた狭いところでの作業で大変である。

責任上、今度は平均に盛り合わせが済んだか？失礼な処はないか？点検も大変……古兵は「まだか、まだか」と急かすが気だけが焦る。

「準備が出来たら班長を呼んでこい」と言われて班長を呼びに行く……全員が揃い「戴きます」の合図で食事が始まった。しかし、今までの数分間の行動が、まだ継続しているようだ。心の内に何か不安が残っていたのであろう、上座を見たところ、班付伍長と古参兵が、何やら腕の取り替えをしているのが見えた。

二人の動作も他にあまり目立たない仕草で、近くの者以外、知らないようであった。それは、班付きの汁椀に、中味の汁が入っていなかったのがある。これは只で済むことではない。(その席には班長は他の用件で来ていなかった)

班付きと古参兵は食事半ばで、席を立てってしまった。入隊して食も喉に通らなかつたのは、この時だけだ。食事も終わり、片付けが始まった。上段寝台の上から古参が「今日の当番長、終わったら一寸来い」と声がかかる。

きた……もう観念した。(班で一番うるさい乱暴者で通っている中隊一

の怖い古兵殿なのだ、この人に呪まれたら、鷹に雀、蛇に蛙である。

理由が分かっているだけに尚のこと、古兵同士で何か話している。

「村川、参りました」しばし沈黙が続く……ますます薄気味悪い。

ややあつて

「あそこから鞭を持ってこい」

「ハイッ」

と返事をして何時も古兵が愛用している馬追いのムチである。

それを持つていくと、黙って受取り、おもむろにしごき出す。たった一、二分の短い間だが、私にとつては、恐ろしく長い時間に感じられ、いろいろなことが走馬灯のように頭の中を駆け巡る。顔が青ざめていくのが自分でも分かる。

「何で呼ばれたか分かるか？」やつと口を開く。

「ハイ、申し訳ありませんでした」と素直に謝る。

「あのなあ……俺も長いこと軍隊で飯を食っているがこんなこと始めてだ」

ドスの利いた声だ。今手に持っているムチが、今か今かと頭の中を駆け巡るのだ。上から見下ろす鷹の目、下から見上げる小者の目、目を交わすと、命を落とすという恐れ的心境だ。

あの時の状況は一部始終、二段ベッドの上で見っていたので、分かっているのである。大勢やつても、一人一人の責任を持ってやれば、無事に事は終り、みんな楽しく食事が出来たのだ。

「戦場へ行つたらどんな失敗も許されないのだぞ……お前あの時全部点検したか」

「ハイ見ました、しかし班長殿の所の汁椀が、蓋付きなので古兵殿の隣で蓋をとつて見るのは失礼と思い〇〇殿(二年兵)が見て(点検して)いまし

たので、失念致しました」

再び無言が続く。

「誰がやつても、失敗する時はするものだ。失敗をやつても取返ししつゝものをつかないものがある」

「・・・」

「分かるか・・・」

段々説教の内容が変わつて来たようだ。班内の他の者は、皆二人の側から離れ、見て見ぬ振りをしているようだ。

班内の空気が、一気に張り詰めたような感じが、漂っている。

ボツリ、ボツリと、今までのドスの利いた声が、穏やかに静かに語り掛けた。目と目がかち合つて居たが、穏やかな目になっていた。

話しをしていると古兵の声で「ハッ」と気付いたとき、どのような心境になつたのか、鬼の古兵殿が泣いているのだ。涙が一筋落ちた。

自分も今まではりつめた糸が切れ、どつと涙が溢れてきた。

説教をする者、される者が互いの心を読み取り、感動の涙であり、和解であつた。

「心配をかけて申し訳ありませんでした。」

「これから気をつけるよ・・・よし、帰れ」

思いもよらない古兵殿の、心のこもつた説教に感動する。その後其の古兵殿と親密な関係になり、随分世話になつた。(鬼の目にも涙は誰にも分からなかつた)

古兵殿は、昭和二十年一月、加護演習の動員で、沖縄戦線に赴いた。一度あの時の御礼が言いたい。無事帰国したのであろうか・・・

☆古兵の信頼を受ける者。

・真面目に一所懸命に勤務する者。

・他人の嫌がる事を進んでする。

・自分の全能力をだして、何事にも当たり、人の先に出る。

・動作が敏捷

☆古兵から目をつけられる者

・要領のよいもの、ずる賢い者

・お世辞の上手な者

・裏表の多い者

・動作が鈍い者

☆古兵から存在を無視される者

・何をやらしても駄目な者、また遅いもの。

・営内では、時、所構わず、いろいろなことが起こる。何処へ行くにも、四方へ気を配りながら行動しなければならぬ。特に上官に対する欠礼は厳しく、如何なる弁解の余地もないのだ。

一歩外へ出たら大変、初年兵以上は、皆敬礼をしなければならず忙しい。また直属の将校は全部停止敬礼なのだ。直属でなければ、停止しなくてもよいのだが、暗がりや間違ふ。将校であれば全部に停止敬礼をしておれば間違いない。将校の中でも、初年兵があまり固くなつていたので笑いながら答礼をする人もいる。

営内で古兵に睨まれたら最後、とことんいびられる。古兵同士で申し合せてあるから、何をしても何処に居ても、目をつけられて浮かぶ瀬がない。

利口すぎても、馬鹿になつても、海戦、山戦の弾の中を生き抜いてきた古兵の目を潜ることは、大変なことで、初年兵にとって一日一日が戦いであつた。